

柳澤家：清香（母） 靖明（父） →
みるきい（犬）、碧生（長男）



Karen.J

今回生まれた“翠生（次男）”（“すい”と読みます）

「心の色」と「頭半分」

さて、助産所感想ノート(?)も9冊目を迎えたらしいですね。今まで父親が書いたことがないみたいなので「今後、父親の流れをつくるためにも第一人者になろう!」と意気込みました。(わたしの人生は大体そんな感じですよ(笑))

「心の色」……2011年9月21日3時頃、我が家に次男が誕生しました。顔を見るまで名前が決まらない、もちろんそれもありましたが、心の色を感じてみよう!とも思っていました。そこで感じたのが、翠でした。翡翠(ひすい)という言葉に使われる漢字で、美しい石(みどり)という意味があります。美しい心、そして、美しい意志(石)で伸び伸びとした成長を願っています。

そう、初めて彼の顔を見たのは尻から出ていた頭半分。リアルタイムかつ肉眼で我が子の頭半分が見られるのは父親だけです。母親は知りません。言わば、専売特許。(体が柔らかく本気で見よう!と思ったら別かもしれませんが、そんな余裕が母親全般にあるとは思えません。)思いっきり母親に自慢しよう!というわけではなく、この経験が人生になんらかの形で影響するのではないかと生まれた瞬間に思いました。(まだ、生まれて数日なのでなんとも確信はありませんが……)

長男の時は、病院出産でした。立ち会いを希望したのですが、看護師のおばちゃんに唆されている間、見えない妻の悲鳴だけが聞こえ意識が宙ぶらりんになっていました。(ホント、記憶がありません。現実逃避というやつでしょうか。)意識が戻ったのは、産声を耳にした時です。瞬間的に涙が溢れ、号泣すること数十分。

今回は、正直あっという間にポッコリ生まれた感じだったので良い意味で感傷に浸る余裕がありませんでした。(妻に言ったら怒られるかもしれませんが……)それは、きっと“安心感”や“安堵感”といったものを、鵜野洲さんを始めとした助産師さんと助産所という場所がそうさせてくれたのだと思います。病院を批判するつもりはありませんが、どうしても機械的に感じてしまうことは否めませんでした。年間、何百人という赤ちゃんが誕生する病院と数十人という助産所との違いだと思います。

今回、助産所での出産を経験して(わたしは生んでいませんが、あえてこう書きます)なんて心地がいいんだろう〜。と感じています。アットホームな感覚とあたたかい人たちに囲まれて子どもが生まれたことを心から感謝します。ありがとうございました。

余談ですが、“会陰切開”という行為からも違いを感じずにはいられませんでした。効率化だけを求めたオートメーション化がもたらす、人と人との気持ちの分断。人が誕生する場所、生命の誕生に効率化はありえませんか。どんなに科学化が進んでも恐らく、人間がらカ月で生まれる時代は来ないでしょう。基本は“自然”ということを改めて学ばせていただきました。

さて、もう1ページ書いてもいいですか？ ダメと言われても書きます。

わたし自身、念願の育児休業を取得してしごとを休んでいます。長男の時は、ちょっとビビって2カ月だけしか休みませんでした。が、今回は身を削って半年休みます。(無給になるので生きていけるか不安ですが、妻も後押しをしてくれました♪)

まず、宣伝から。長男の時に書いた『育児体験記』が冊子になって発行されています。はとがや助産所にも1冊ありました。雑誌の棚にカエルの顔『パパの育児休業体験記』です。40ページをご覧下さい。可愛い子が目印です☆。

なぜ、男の育児休業か？ 実は取得率をみると、ここ13年で15倍に増えています。しかし、取得率としては1.72%。2010年に改正育児休業法が施行され、男性が育児休業を取りやすくなりました。(妻が専業主婦や休業中でも取れるなど)それに合わせて、政府は2020年までに13%まで引き上げるという目標を掲げました。約75倍です。今後どんな政策が打ち出されるのか分かりませんが、当事者として一番のネックは“お金”です。夫婦で休業中は給与などが“ゼロ”になります。今の日本ではおそらく「どっちかが休めばいいじゃん。2人して休むことなんてない」きっとこう思われる方が大半ではないでしょうか。

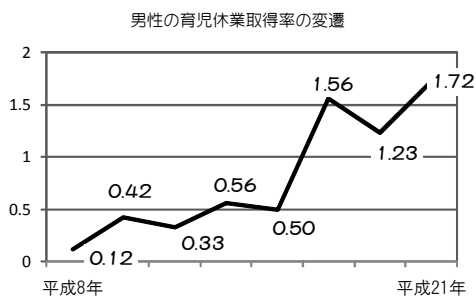
諸外国では、休み中でも給与を全額保証する制度や父親が休まなかったら育児休業を取得できる期間が少なくなる制度、休んでも昇任や昇給に影響はないという考え方があります。その結果、

男性の育児休業取得率が90%を打ち出している国もあります。

最近読んだ本に、フィンランドの育児事情が書かれていました。フィンランドでは、妊娠中から様々な育児保証が始まります。妊娠も終盤に入ると「母親支援キット」と呼ばれる大きな箱が送られてくるらしく、その中には“オムツ”や“おもちゃ”、“哺乳瓶”など3万円相当が入っているらしいです。日本では、わたしの記憶だと「絵本」か「植木」が行政から支給されるだけです。

こういった例をあげるだけでも子どもを育てやすいとは決して言えない日本の国家行政レベルでも子ども関することは、少子化担当大臣。どうして“子ども省”がないのか。6歳まで育てたら次は教育にお金がかかる。教育費に関しても諸外国に比べれば最低ラインしか国はお金を出さない。医療費だって同じ。中学校まで無償という自治体もあるが、子ども医療費が無償ではない自治体も存在する。(ここを語ると長くなるので止めます)

日本の国民的コンセンサスはここにはない。少しでも、意識を向けるために、人生をかけて自分がやれることはやっていきたい。子どもたちの今、そして未来のために……(終)



厚労省「平成21年度雇用均等基本調査」結果概要より作成

最後に、子どもに必要なのは母性と父性です。生まれて間もないこの時期、父もしごとを忘れて、両性で思いっきり子どもを愛してみませんか？ 今がチャンスですよ！ お父さん。